

専門用語研究

Journal of the Japan Terminology Association

No.1 1990-08

巻頭言 「専門用語研究」発刊にあたって	大塚明郎	表紙	2
シンポジウム特別講演 民族服飾と専門用語	大丸弘		1
シンポジウム講演 日本工業規格における用語規格	東秀彦		5
シンポジウム講演 辞書編纂と専門用語	倉島節尚		10
寄稿 日本の医学用語についてのおぼえ書き	大島智夫		18
提言 専門用語について — われわれが扱う範囲	大塚明郎		22
提言 専門用語研究会の将来構想試案	長山泰介		23
提言 専門用語研究会の役割	細野公男		25

専門用語研究会
Japan Terminology Association

「専門用語研究」 発刊にあたって

大塚 明 郎
OOTUKA, Haruo

1988年の春だった、専門用語研究会を発足させたのは。それまでは専門別の学会が自分の学会誌用に選んだ専門用語集をもっていた。その主なものは文部省編集として、“学術用語集”の名で刊行され、それが28分野に及んだ。うち25分野は科学・技術関係だった。

ところが、専門学会は、原則として全く独立なので、その用語選択にあたって互に独立であった。2つの学会に共通の用語委員でもない限り、同一概念に同一用語が採用されるとは限らない。学会ならそれぞれ自学会用の専門用語を選ぶから、2つの異なる専門用語が採用されることはあり得る。そうなっても学会別に活動している間（明治から昭和中期まで）は別に不都合は起こらない。しかし、1概念を対象とする現実の場合、2学会の2専門用語が1つのデータベース（DB）に入力されていると、そのDBの利用者にとっては煩雑なことになる。

大容量コンピュータの普及とともに、大型DBができるから、1概念表現に複数専門用語が対応するとなると、その取扱いはますます煩雑になる。

以上一国一言語の場合を考えたが、複数言語の専門用語も入力する場合は、さらに複雑になる。処理が煩雑になるではすまされない。

この問題を解決するには、ハード面の研究もあるが、概念を表現する専門用語に関する重要な研究がある。しかも複数言語間での処理まで含まれる。

それらの問題を研究する目的をもって、専門用語研究会は生まれた。その広場の役を演ずるのがこの会誌である。

民族服飾と専門用語*

National Costume and Terminology

大丸 弘** DAIMARU, Hiroshi

私の専門は服装文化論ですから、専門用語としては服装に関連する領域です。ただし現在の私はそのなかでも具体的には博物館での標本資料の整理と、服装全分野の二次情報作成という作業に従事しております。それで本日はとくにその作業のなかでの経験から、用語についての悩みをきいていただくことにいたします。

1. 博物館業務のなかでの標本名

衣服にかぎりませんが博物館、美術館あるいは展覧会目録というものをみると、そこにはかならず品名、標本名、作品名がなっています。たとえば絵画作品の場合ですと、「自画像」という作品名につづいて作者名、制作年、材料、寸法、所有者などがあるわけですが、大部分の方は作品名と作者名しか見ませんし、それで同定ができる場合が多いのです。ということは、作品名というものは一般にそれほどなじまれ、信頼もされているということなのでしょう。

しかし目録作製者をふくめた研究者の側からいえば、作品名ほど頼りないものはないといえます。いい加減なもの、と言ってはいいすぎかもしれませんが。

近代の芸術作品には創作のテーマというものがありますから、そのテーマが作品名でもあることがふつうだと思います。しかし実際には肖像画や風景画のような「実用美術」であるとか、作者自身が作品名をつけたもののほかに、第三者が作品からテーマを読みとるということはそう容易なこととは思えません。

とりわけ衣服や陶磁器のような工芸作品、あるいは生活用品については、製作者の動機の中の創作的テーマを品名とすることなど、まず不

可能です。

(1) 用語無統制の論理

私ども民博では収集した標本の標本名については一切の統制をしませんでした。その結果が表1に示すような現状となっています。

ここにあるのは私が見て奇妙だともう例の一部ですが、こういう名前を考えだしたひと、あるいはつけるしかなかったひとのことを思え

表1 民博標本資料品名リストに記載された属性並記的あるいは説明的標本名

アイヌ藍染麻地仕事着 / 浅黄地白斑点模様衣 / 一本歯下駄 / 犬ぞり用の胴バンド / 踵付スリッパ型薬製履物(1足) / 刀の鞘ノミ / 髪の下につけるもの / 革帯ノ付属かな / キツネの頭毛皮を利用した壁掛け / 狐の頭に下げるもの / 木の一端を削って顔を描く(1対) / 儀式ノトキ用フルモノ / 薬(マラリアヲ治ス薬) / 割りの深さ計測具 / 国旗棒の上の丸 / 先の尖った棒 / 自然木の枝を割った棒 / 支那人間に於ける婚礼招待状 / 小児の小便をうける道具 / 神社ニ具ヘテアルモノ / ソバウドンをゆでる時に用ふるもの / 象の悪しき幽霊 / 象の足の置物式物入れ / 馴鹿の鞍に荷をつけて運ぶもの / 長いひも / 晴着用ワンピースの下に着るワンピース / マニオクのパンを焼くのに用いるヘラ / 丸形放射状平編み笠蓋 / 未婚女性が髪につり下げる紐 / 綿地緋子供着物 / 綿地つつびき夜着 / 木製割り抜き背負壺 / 木製長方形搗鉢 / 木綿鉄砲袖肩接ぎ単衣 / 木製鉄砲袖接ぎ身頃縫衣 / 木綿布藍ローケツ染スカート / 紋付小紋着物 / 椰子の実利用柄杓 / 椰子の実割棒 / 椰子の実汁ヲ取り道具 / 結髪ノ両端ニ附スル布片 / 指ではじく楽器 / 老僧仮面ノかぶり物

* 第2回専門用語シンポジウム(1989年11月18日)での講演原稿を加筆。

** 国立民族学博物館、大阪府茨木市

ば、笑ってばかりもおれません。国旗の上につけるあの金色の丸いもの、あれを正しくはなんと呼ぶか、皆さんご存知でしょうか。

弁解をするわけではありませんが、われわれが“国旗棒の上の丸”に正しい名前を与えなかったのは、なにもわれわれの不勉強のせいばかりではありません。民族学には研究の基本的態度としての相対主義というたてまえがあります。ものごとを分類したり、そのそれぞれの分類枠に名前を与えるについても、通文化的な共通性という観点にたつ場合には、きわめて慎重な構えが要求されます。ですからある文化で使われている品名を、他の文化の同種のものにうかつに用いるということには、私たちはかなり警戒的です。われわれ日本人の使う「ふとん」という概念が、そのままフランス人の寝具にあてはまるかどうか。そのためにさし当りは、フィールドワーカーである収集者が現地名にもとづいてつけた標本名を、なんの統制もせずそのまま用いる、という原則がうまれたのです。

とはいうものの、そういう現地主義がある種の無責任現象の口実となっていることは否定できません。またその前に、標本名とはなにか、さらにはそもそももの名前とは一体なんなのか、といった基本問題についての合意を求める努力を怠ったというそりも、いくぶんかは甘受せざるをえないかもしれません。

(2) 単純化の論理

標本が標本名をもたなければならぬ理由は、それがなんであるかを示すためです。

これは明快な理由のようですが、すこし考えてみると、よくわからなくなります。といいますのは、もの名前というのは、ある一つのものをそれ以外のすべてのものと区別するための標識という目的と、あるグループに括るための目的という2つにかかっているためです。前者はふつう固有名詞と言っているものに近いわけですが、しかしたとえばシャーロックホームズという固有名詞は、それが果して名探偵なのか、隣の犬なのか、新宿の喫茶店なのか全く不明です。博物館員の業務にとって必要なのは、それが衣服なのか船なのか、素材が繊維なのか石なのか、畳めばポケットに入るものか畳二畳敷き

あるものか、といったことです。

そういう意味からは、標本名というものは、図書館学的な言いかたをすれば件名であって書名ではないのです。書名に近いのは現地名でしょう。

標本名の役目はそれがおおよそどんなものであるかを示すグループ概念だとして、そのグループ分けの基準がなんであるかといえば、非常に実際的な条件として、標本の管理という業務上の便宜を、まず第一に挙げざるをえないのです。標本名はだれのためのものか。それは博物館員のためのものである、といえれば批判は免がれないでしょうが、しかし民博のみならず沢山の非常勤職員の手で運営されているのが実状である今の日本の博物館では、とくに訓練をうけていない人達にも理解できるような、かつ保管の物的条件とある程度調和できるような単純なグループ概念が、望ましい標本名といえるのではないのでしょうか。

(3) 海外での状況

標本名の問題はもちろんどこの博物館でもかかえている共通の課題です。ですからこのことに関する研究は少なくありませんし、ICOM(国際博物館協会)でも、衣服の標準分類法を考案して、その利用を推進しています。今日はこのICOM案を御紹介するのが目的ではないので詳しくは触れませんが、ICOM案の最大の難点は、着方がわからないと区分できない、ということです。

着方がわからない、と申しますと専門外の方は不思議に思われるかもしれませんが、世界各地のもちろん行ったこともないところの衣服を相手にしている私たちには、着装法の正確な情報を伴った標本に出合うことは、むしろ珍らしいくらいなのです。

(4) MCD分析コードの考え方

衣服標本名をグループ名と考え、それについての命名システムを構築した例に、わが国の美術史界が行ってきた伝統的方法があります。「芦水鳥文様紅地縷子縫箔小袖」といった組合せであります。多少長たらしいので、節をつけて唱えたいくなるようなこの命名法は、日本の工芸染織の領域に関するかぎり最上の方法ではないか

と私は思っています。といいますのも、この方法は、文様名、色名、素材名、加工技術、衣服形態という衣服の基本的要件を面としたファセット構造になっているのです。ついでに申しますと、こういうグループ概念としての標本名に対し、たとえば「冬木小袖」といった俗称もあるのですが、この方がある特定の1枚のみをさす呼称で、本でいえば書名にあたります。

私たちが現在標本名として工夫しているのは、簡単にいえばこの「芦水鳥文様…」の世界版で、それをもう少し科学的に分析したものです。また「芦水鳥」などということばはすべてアルファベットと数字であらわします。しかし私たちの館内業務ではともかく、外部にむけては、たとえば小袖がAV015ではあまりにも不親切です。すくなくとも衣服の形態名についてぐらいいは誰にもわかるような、なじみのあることばを使いたいと思うのです。

ところがこの「なじみのある」が曲者で、そこに厄介な文化の問題がはいりこむわけです。たとえば前開きの衣服は世界的にはカフタンとよぶ傾向があるのですが、われわれ日本人からすれば冬木小袖になんとかカフタンなどという標本名をつけることには抵抗があります。そこで学問的な共通標本名としては、できるだけ特定の文化的背景をもたない専門用語をつかおうとする傾向があります。たとえば円筒衣とか、脚衣とかがそれです。

もっともそうした新造語の中には凝りすぎてわかりにくいものがあります。「チタイ(恥帯)」という音をきいて、それが「ふんどし」をさすと理解できる人はすくないでしょう。あまりむずかしい専門用語をつくるなら、数字コードの方がまし、と言われかねません。

2. 索引・データベース作成業務 のなかでの用語

(1) 業際分野のむずかしさ

きょう私がおはなす目的のひとつは、専門用語の未成熟分野のひとつの状況報告ということでもあります。

服装関連の二次資料を作ってきて感ずることとは、未成熟という点はそれはそれで確かなの

ですが、その成熟を阻む原因の最大のものは服装が実にさまざまな分野の典型的なフュージョン世界である、という点です。

服装の場合のフュージョン性は、ふつう指摘される学問のいくつかの分野の学際性、ということもちがうのです。基本的困難さの第一は、この世界がつねに業界にリードされる性格をもっている、ということです。

業界というのは主としてファッション業界になりますが、ファッションというものは、本来的に学術用語が必要とする一義性、安定性といったものに抵抗する体質をもつのです。

たとえば下着ひとつをとあげましても、下着ともいえば肌着ともいう、そのほかインナー、ランファン、ボディファッション、アンダウェアなどといういいかたが、きょう生れたかと思えば明日は死語扱いされる運命にあります。それまででないような用語を工夫し、表現を斬新なものにすれば、刺激的で注目を浴びることができます。

フュージョン性の困難さの第二点は、この世界が日常の生活と密着しているため、日常の生活感情のニュアンスに支配されずにはおれないということです。私はこの点を用語の情念語化の傾向といっています。

ことばの情念語化については廁、便所、WC、お手洗、お化粧室という変遷の歴史が有名です。服装関係ではこうしたケースはほとんどすべてのアイテムにおこりえます。大人用の衣服をアダルトと言って尋ねると、ビデオ売場を教えられたり、生理という表現を女性の特別な現象にのみ限定したり、といったたぐいがあります。

私たちの学問ないし教育の世界でつねに問題となっていることばに、ファッションということばと、被服ということばがあります。ファッションということばは現在でも文部省レベルでは、学校名はもちろん、学部学科名としても認知されていません。中国ではこのことばに「時装」という正しい訳語が与えられていますが、わが国ではファッションすなわち流行という誤った認識が定着した結果、軽佻浮薄の代名詞のようにうけとられ、適切な訳語を考える努力もみられなかったわけです。しかし諸外国では直

接服装関連の学問の領域だけではなく、文化人類学や社会学の領域でも、ファッションは立派な研究テーマのひとつであり、影響力の大きい教育分野にもなっているのです。

ファッションに対する文部省好みの用語は、「被服」といういいかたであります。用語変遷史のうえからいいますと、このことばは比較的歴史が浅いのですが、明治の中頃から主として軍隊用語として採りいれられ普及しました。したがってその影響の範囲で、たとえば、戦前の高専教育であるとか、一部の固い言い廻しを好む世界一経済学などに使われていました。第二次大戦前に日常的に用いられたのは、おそらく家計簿の中の被服費ぐらいだったでしょう。

現在初等中等教育の家庭科では衣服といっているのに、大学になるとそれが被服にかかります。ファッションを拒絶して被服に執着する体質は、もちろん最終的には文部省の責任ではありません。文部省のブレーンの立場にある、ある世代のひとびとの、固い学問用語というものについての考えかた、被服廠（正確には陸軍被服本廠）の過去にむすびつく情念がその根拠のひとつとはいえないでしょうか。

(2) 言葉になりにくいものための用語

—イメージ検索のための構築

私たちの世界でデータベース構築の際につねに話題になるのは、ほんらいことばではない分野の情報を、どのように整理し、検索可能のかたちにするか、という問題です。これを画像検索と感性検索の2つにわけて申し上げてみましょう。

画像検索については、すでにさまざまなデータベースが実用化しているわけですが、その共通にかかえている課題は、画像を引き出すための適切な用語システム、すなわちシソーラスの設計です。つまりこの方法は、画像をことばで探すシステムですから、正確に言えば画像検索というより、画像の（言語）コード検索ということになります。

そうではなくて、画像を画像のキーで、つまりキーパターンによって検索することができないものか、それがいま私のもっとも興味をもっているテーマであります。

感性検索といいますのは、たとえば「女らしい服」という概念での検索で、データは需要の点からいえば大部分画像になると考えられますので、これも画像検索法のひとつともいえますが、文献データも対象になります。

画像情報のデータベースにはファッション業界で切実な需要がありますので、すでに小規模のものは営業をはじめていますし、通産省を中心にいろいろなプロジェクトが進行中です。しかし率直に言って、情緒語を用いての検索は現状では画像検索の中でのつけたり的部分にすぎないところでしょう。その最大の理由は、女らしい服などという情緒語が一般にあまりに主観的で、それをキーとして個々のデータにつける作業も、十分説得力のある方法が見いだせない、ということのためです。

私はこれまでに感性検索と感性語検索という2つのことばを使い分けたつもりですが、常識的には感性検索といわれているシステムは、画像等のデータ中の感性語をぬきだすか、だれかが感性語キーワードを付与し、そのことばで情報を探す方法です。

それにたいして、画像のキーパターン検索にあたるような真の感性検索—検索者の感性自体による情報検索—は可能なものでしょうか。

となると、はなしはIBMの端末の前でより水晶玉のまえでやる方が向いているようにも思えますが。

私がいま考えているのは、日常的な情緒語をそのまま検索語としてつかうのではなく、いくつかの要素に分解してつかえないかとか、ある情緒表現とデータ群とが一對一の対応をすることでなく、付加的表現を足したり引いたりして、対話的にデータを取捨するという方法とかです。

心理学の世界でも感情や情緒の分野は比較的開拓の遅れているところだそうでありまして、その方面の文献を調べましても現在のところあまり役にたちそうな研究が見当たらないことは残念です。

日本工業規格における用語規格^{*}

Terminology Standards in Japanese Industrial Standards

東 秀 彦^{**} HIGASHI, Hidehiko

“言葉”は、情報を伝達するためのもっとも重要な手段であり、語又は句の形をとり、文字又は音声で表現される。

言葉は用いられて初めて効用を発揮するのであり、ある目的をもって使われる言葉を、“用語 (term)”と呼ぶ。用語には、日常生活で広く用いる“一般用語 (general term)”と、科学技術文献、規格、法令、学術書などの中で用いる用語のように、使用又は意味が特定の分野に限られ、主として特定の分野の専門家が用いる“専門用語 (technical term)”とがある。

一般用語は、国語辞典などの中に取り上げられているものが多いが、一般的に言えば、辞典に頼るまでもなく、使う人々の連想を頼りにして適当に用いられ役に立っている。また一般用語は、時代の移り変わりにつれ、その意味も変わって用いられているが、それはそれなりに効用を果している。

専門用語は特定の分野の専門家が用いるものであるから、意味のあいまいさは許されない。すなわち、その用語が表す“概念”が正確・明確に規定されているものでなければならず、その用語が意味するものが、その用語を用いる人の違いによって異なることがないものであること、つまり概念が統一されたものであることが必要とされる。そして、その用語が生まれてきた元の概念が存在する限り、その概念を表す用語もその寿命を持続するといえる。

用語は、ここに述べたように、“一般用語”と“専門用語”とに大別できるが、我々の日常生活が機械化されてきたのにつれて、本来、専門用語であるものが、一般用語に組み込まれるようになってきた。この頃は、いわゆるハイテクを駆使した“電子デバイス”を装備する機器が、一般家庭で用いられるようになり、その取扱説明書の記述の分りにくさが、一般新聞の記事として登場するまでにいたっている。

専門用語の標準化が、政府によって初めて体系的に取り上げられるようになったのは、大正一昭和期であった。その一つの動きは、工業品規格統一調査会〔官制が勅令によって定められていた組織で、日本標準規格 (JES) の審議機関〕の「用語委員会」によるものである。この委員会は、大正11年 (1922年) 10月に開かれた調査会の第2回総会において、JES で用いる専門用語の統一及び規格成文の整理を任務として設置された。この委員会は、昭和9年 (1934年) 12月に「整理委員会」と改められ、組織も一段と拡充強化され、調査会総会の議決を経て主務大臣 (当時は、商工大臣) が各省大臣にはかったうえ制定する JES はすべてこの委員会の審議にかけられ、用語及び成文の整理が行わ

* 第2回専門用語シンポジウム (1989年11月18日) における講演原稿を加筆。

** 日本規格協会、東京都港区

れた。

政府による専門用語の標準化のもう一つの動きは、昭和2年(1927年)5月に設置された内閣資源局によるものである。同局では、各種の資源の調査を行うに当たって、政府の各省、民間の各産業部門によって同一事物に対する用語が異なり、意味の不明、解釈上の誤りを生じ、事務能率を著しく低下させたので、資源局はその附属機関である「資源審議会」にはかつて、資源に関する用語統一の一般方針を定めた。この方針は、昭和4年(1929年)12月の閣議で採択され、分野別に逐次に委員会を設け、関係官庁、大学、学会及び民間企業の委員の協力の下に、用語の審議に着手し、昭和5~14年(1930~1939年)の間に、「薬品」、「燃料、油脂、塗料及び顔料」、「機械」、「金属類、鉱物類及び土石類」、「電気」の5分冊に分けて「標準用語」を制定した。これらの用語集は閣議にかけられたうえ、内閣告示として公布されるとともに、内閣総理大臣から各官庁に対し使用奨励方の訓令が出された。

昭和17年(1942年)に内閣技術院が発足すると、資源関係の用語だけでなく、広く科学技術全般にわたる専門用語を急速に整備することを考え、この仕事を「全日本科学技術団体連合会(通称、全科技連)」に委嘱した。全科技連は、各専門の学協会に原案の作成を委託し、活発に作業を進め、計画の大部分を終戦までに完了したが、ついに公表されずに終わってしまった。戦後の混乱から、専門用語の標準化の問題は一時忘れられた形であったが、商工省特許標準局では、JES制定上、科学技術に関する専門用語の統一の必要性を痛感していたので、昭和21年(1946年)秋に文部省にはかり、同省が中心となり特許標準局が協力して、この仕事を再開することになった。そこで、文部省では、昭和22年(1947年)2月、当時の「学術研究会議」の中に「学術文献調査特別委員会学術用語制定分科会」を設けて、学術用語制定のための調査審議に着手した。その後、行政機構の改革によって、この事業は文部省の「学術用語調査会」に引き継がれ、さらに昭和24年(1949年)7月以降、この調査会は「学術奨励審議会学術用語

分科審議会」と改称され、今日に至っている。

学術用語は、関係学協会が原案をまとめてきたものであるが、その整理方針は、「当用漢字」、「現代かなづかい」など漢字及び国語に関する文部省の施策に根本をおき、全科技連がまとめた案を、この方針に即して見直していった。なお、工業部門の専門用語のうち、学術というよりも応用技術的な色彩が強いものについては、(財)日本規格協会の「工業標準用語調査会」が工業標準調査会(戦後のJES(日本規格)の審議機関で、特許標準局が事務局となった)の指導の下に調査審議を進め、特定の分野(鉄道車両、航空など)別の用語集が、日本規格協会から発行された。

以上に述べたものは、いずれも「用語集」として公開されたものであり、用語と対応英語とを示すものであって、「定義」を示すものは皆無であった。しかし、工業規格などで用いる専門用語では意味のあいまいさは許されない。このような観点から日本工業規格(JIS)(昭和24年(1949年)に公布された「工業標準化法」に基づく国家規格(national standards)。欧米の工業先進国では、国家規格は必ずしも法律に基づいて定められているとは限らない。例えばイギリスはイギリス規格協会、西ドイツはドイツ規格協会、アメリカはアメリカ規格協会というように民間の規格協会が定めている)では「用語規格(terminology standard)〔専門用語について規定する規格で、用語の定義を含み、必要に応じ解説・図解・例などを伴うもの)を定めるようになり、また用語規格以外の製品規格・方法規格などでも、その規格の中で用いる主な用語について、「用語の意味」を規定するようになった。

ヨーロッパ各国が、「用語規格の作り方」についての国家規格を定めるようになったのは、1960年代の初頭であって、西ドイツのDIN 2330-1961 Concepts and terms; general principles, イギリスのBS 3669-1963 The selection, formation and definition of technical termsはその草分けである。1947年に創立されたISO(International Organization for Standardization, 国際標準

化機構)ではTC 37 Terminology (principles and co-ordination)でこの問題を取り上げ、ISO/R 704-1968 Naming principles, ISO/R 919-1969 Guide for the preparation of classified vocabularies, ISO/R 1087-1969 Vocabulary of terminologyなどを逐次発表してきた。

我が国では、上記のドイツ規格、イギリス規格及び国際規格のほか、各国の国家規格機関(national standards body)の機関誌に掲載された関連文献などを参考とし、「日本規格協会標準化原理委員会用語規格分科会」で、昭和44年(1969年)1月から調査審議を開始し、その後6年間にわたって60回の会議を重ね、また中間案について、JISの幾つかの分野の用語規格の立案に当たっていた専門委員長など学識経験者約120名の方々に対してアンケート調査を行い、御意見をできるだけ取り入れるなどして、昭和50年(1975年)3月にやっと「用語規格のまとめ方手引」の公表を見るまでにいった。この手引の内容は、もともと上記イギリス規格にならって、将来はJISの一つとして取り上げられることを期待していたものであったが、なかなか実現を見ず、JIS Z 8301規格票の様式の今回の改正に当たって、やっとその「参考」として取り入れられることになった。すなわち、上記手引をもとにして原案作成を行い、「参考3 日本工業規格における用語規格のまとめ方」ができた。なお、「参考3」は、規格の本体及び附属書の規定に関連する事柄を補足するものであって、規定の一部ではない。

この参考3は、A4判の印刷物で20ページ以上にわたるものであるので、ここに全文を掲載することはできないが、主な事項について説明を加えることにしたい。

この参考3は、用語規格の定義・目的、この参考で用いる主な用語及びその定義、用語規格作成の手順、用語規格作成上の要求条件及び規定方法、並びに用語規格の構成・様式について記述している。なお、以下の記述で【 】でくくってある部分は、理解を助けるために書き加えたものである。

用語規格の定義・目的の項の「備考」で、「対応国際規格がある場合には、これを採用して、国際一致規格【ISO又はIEC(International Electrotechnical Commission, 国際電気標準会議)による国際規格を、技術的内容及び様式を変更することなく日本語に翻訳して、そのまま日本工業規格とするもの】としての用語規格を定めるのがよい。これによって、既存の概念を改める必要が生じるかもしれないが、このような場合でも、国際協調の立場を尊重することが望ましい。」と記しているが、一般的に言って、用語規格を定めようとする場合、審議に加わる人々の間で、概念のとらえ方に食い違いを生じることがはまれではなく、この食い違いを調整し統一することが、用語規格作成上の要点である。国際規格の作成に当たっては、西ヨーロッパ諸国、アメリカ及び日本、ソ連及び東ヨーロッパ諸国の間で、三極的な対立が見られることが多い。

次に、この「参考」で用いている基本的な用語及びその定義を示す。

【分野(知識の) [field (of knowledge)] 専門化された知識の範囲。】

客体(individual object)人間が存在を認める(又は認めることができる)周囲の対象及び事象、並びに精神的現象。

概念(concept) 客体の本質について人間が抱く考え。一般に、用語、文字記号、図記号などで表現する。

特徴(概念の) [characteristic (of a concept)] ある一つの概念を構成している個々の性質。

内包(概念の) [connotation; intension (of a concept)] ある一つの概念を構成しているすべての特徴の集合。

概念“機械” の内包	特徴1	抵抗力がある物体が 組み合わさったもの。
	特徴2	その内部に運動があり、 各部の運動は制限されている(並進・ 回転・らせん・球面のいずれか)
	特徴3	外部からエネルギー を受けて仕事をする。

外延 (extension) ある一つ概念が包含すると考えられる下位概念【類概念に対する種概念、全体に対する部分】の集合。

【類概念“機械”の外延 — 種概念である
動力機械、作業機械、計算機械など】

概念体系 (system of concepts) 類概念と種概念との関係、全体と部分との関係などで結び付いている概念の集合

分類体系 (概念の) [classified series (of concepts); classification] 構造及び関係位置を明確にしてある概念体系。例 商品分類

定義 (definition) 概念を言葉で記述したものの。

【概念“動力車”の定義は、“原動機をもち、単独に、又は自己以外の鉄道車両と連結して運転する鉄道車両。機関車、電動車及び内燃動車の総称”と規定されている。この定義の前段は内包による定義であり、後段は外延による定義である。】

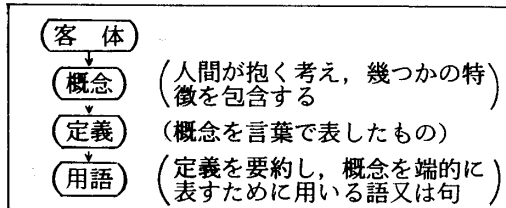
意味 (meaning) ある用語が表現する概念。

【つまりある用語が持つ意味を言葉で表したものが定義である。】

用語系 (terminology; nomenclature) ある概念体系 (特に特定の分野の) を示す用語の集合。

【この定義から、用語規格は用語系に対応する規格であるといえる。】

以上に記載したところを引用して、用語系における垂直的な概念系列を示せば、次図のようになる。



続いて、用語規格作成の手順を要約すると、次のようになる。

(1) これからまとめようとする用語規格の対象となる分野の概念体系を明確にする。

このためには、まず取り上げようとする概念の範囲 (その概念体系が覆う客体の範囲) を明

確にして、かつ、その中の主要な概念の結び付きを明らかにする手段として、概念の系統図を書いてみるのがよいとしている。

(2) 用語規格における用語の分類体系を確立するとともに、採録する概念 (ひいては、用語) の概数を定める。

この点について、対象分野が広い場合には、用語の分類体系に応じて数規格に分割して編集し、まず、基本的・共通的なものを1規格にまとめて制定し、その後まとまった規格から順次に制定・発行していくようにし、また、規格作成の所要期間が不当に長くなることを避けるため、1規格に付き採録する語数は一般には200以下とし、特別な場合でも、500以下にとどめるのがよいとしている。

(3) 採録する概念の統一を図る。

先に述べたように、このことは用語規格作成上の眼目となるものであり、審議に加わる者は、それぞれ自分の考えをよく述べ合い、整理して統一見解を確立することが必要であり、この統一見解の中には、定義に盛り込む必要かつ十分な特徴を漏れなく含んでいなければならないとしている。なお、筆者の経験から言えば、(1)で述べたように、概念体系が明確になっていれば、意見の調整は比較的容易に早く行えるようである。

(4) 概念の定義付けを行う。

定義には、概念を明確にするための特徴を落ちなく盛り込み、その特徴を言葉で表し、その内容は正確であり、記述が明確で分かりやすく、読む人に疑問を起ささないものでなければならないとしている。

(5) 定義に対応する用語を定める。

既に科学技術的に確立している分野の用語規格の場合であれば、原則として、既存の用語の中から、定義に最もふさわしいと考える用語を選定する。また、新しい分野に関する用語規格の場合には、新しい概念・定義に対して適切な用語を作成することになるが、外来語を用語として採用することは、その外来語が一般的に受け入れられているものでない限り避けることとする。つまり外国語を仮名書きにした用語を採用することはできるだけ避け、適切な日本語の用

語を作るように努力する必要があるとしている。
なお、用語の選定・作成に際して対応外国語
(英語が普通)を選定するように記してある。

(6) 用語規格の様式にのっとり、規格の全体
をまとめる。

採録する概念に対して「仮の用語」を定め、
その仮の用語ごとに、あらかじめカードを準備
し、これを用いて上記(3)~(5)の手順による作業
を行うようにすれば、用語規格のまとめに当た
って便利であるとしている。

なお、用語規格の末尾には、用語の五十音順

の索引及び対応英語(その必要がある場合は、
対応英語以外の対応外国語についても)のアル
ファベット順の索引を付けるように記述している。

以上、用語規格のまとめ方の要点について概
略を述べたが、欧米では定義付けられていない
用語は用いないこととしており、また、言語の
相違の問題から、ISOでは略語(abbreviation)
の作成には特に注意するように言っている。最
近我が国では、和製英語のような略語が横行し
ているが、国際的に通用しそうなものは、
改める必要があると思う。

学会予告

詳細については事務局にお問い合わせください。

1990年8月27-31日 2nd TermNet Summer
School, Vienna, Austria

運営は International Institute for Terminol-
ogy Research が実施し、テキストとして
Unesco が出版した "Terminology Manual"
を使用する。

1990年9月10-14日 2nd Latin-American
Symposium on Terminology, Brasilia, Brazil
以下の4パネルに分けて、それぞれの現状と
将来を討論する。

1. Terminology and the Transfer of Techn-
ology
2. Technical and Scientific Translation: new
technologies
3. Terminological Data Banks
4. Cooperation in the Area of Terminology

1990年10月2-4日 2nd International Congr-
ess on Terminology and Knowledge Engin-
eering, Trier, Germany

特別講演8件のほか、以下のセッションで合
計85件の一般講演がある。

Session I : Terminology, knowledge
theory and knowledge engineering—New
applications

Session II : Knowledge-based systems

Session III : Natural language processing

and knowledge engineering

Session IV : Documentation languages and
ordering of knowledge

Session V : Electronic dictionaries

Session VI : Information management in
organizations

Session VII : Computer support in technical
communication

Session VIII : Terminology and knowledge
transfer tools

日本人がかかわる発表論文を以下に挙げる。

Fujiwara, R.: Intelligent design of control
systems combining knowledge-based
systems with conventional design methods

Ueda, Y., Ahlén, S., and Kogure, K.: Declara-
tive control of generation using typed
feature structures

Osada, T., Matsuyama, S., Nakadate, M.,
Nakai, H., and Ishibe, T.: An analysis of
drug interactions using descriptions in drug
package insert documents; a study on
standardizing therapeutic words

Miike, S., and Amano, S.: The structure and
function of the EDR concept dictionary

Tanaka, Y., and Yoshida, S.: Preparation of a
concept dictionary

辞書編纂と専門用語^{*}

Lexicography and Technical Terms

倉島節尚^{**} KURASHIMA, Tokihisa

はじめに

国立国語研究所の調査その他によると、一般社会人の保有する理解語彙は、個人差はかなりあるが、平均的な人で4万から4万5千語ぐらいと考えられている。ところが近年の新聞の用語調査によると、1年間の新聞には異なり語数で10万語を超える単語が用いられているという。新聞の全ページを毎日完全に読みこなすには、一般の社会人の2倍以上の理解語彙が必要とされるということになる。4～5万の理解語彙で社会生活が十分可能であるにもかかわらず、新聞が10万語を超える語彙を使用しているという背景には、次のようなことが考えられる。まず第一に、新聞の取り扱う分野が極めて多岐にわたるということである。一面から最終面までの間に、政治・経済・国際・文化・社会・スポーツ・娯楽そのほか実に多様な問題を取り扱っている。従って、それらの分野における特別な用語が用いられている。次に、一般の人の日常生活に関係する情報にも、相当量の専門用語の使用が必要になっていると思われることである。「暮らしの科学」的な記事にも、かなり専門的で高度な内容が盛り込まれており、そこには少なからぬ量の専門用語が使われている。また、新聞という性格上、地名・人名など固有名詞も相当に多いことが考えられる。

かなり高度の専門語が、新聞・雑誌あるいは

電波を通してお茶の間に送り込まれているという現実を反映して、今日の大型国語辞典には多くの専門用語の見出しが立てられている。利用者は専門用語が載っていることを期待しているし、私たち辞書編集者には専門分野と一般の人とを結び付ける、いわば橋渡しの役目をする立場にいるという気持ちがあって、日常目に触れる専門用語は出来るだけ載せたいと考えるからである。そういう国語辞典編集の現場から見た専門用語、あるいは専門用語辞典について述べてみることにする。以下に述べることはターミロジーの専門家の間では論議が尽くされている問題と思うが、公刊されている『学術用語集』や専門用語集・専門用語辞典しか利用できない者の立場からの発言として受け止めていただければ幸いである。

1. 一般用語と専門用語

1) 専門用語とは

いまさらの感じはあっても、国語辞典における専門用語について述べるにあたっては、「専門用語」の定義について考えておかねばならない。

『大辞林』の「専門語」という項目では、

* 第2回専門用語シンポジウム（1989年11月18日）での講演原稿を加筆。

** 株式会社三省堂 国語辞書編修所、東京都千代田区

「学術・技芸などの専門分野で用いられる語。術語」

とするが、やや狭く限定し過ぎている嫌いがある。他の辞書でも大同小異である。

『国語学大辞典』の「専門語」(野元菊雄執筆)の項では、

「スラングと同じように、特定の社会で人為的に作られた言語、主として語で、特に、職業や専門を同じくする人の間に使われるもの、術語(technical term)ともいう。広義では職業語と同じであるが、狭義では芸術家・科学者・哲学者・宗教家・法律家などが、同じ専門家どうして話すときに使う特定の単語をいう。すなわち、知的職業に従事する者の職業語である。この意味で学者語・学術語(学術用語)に近いが、芸術用語・法律用語・宗教用語などを含むから、学者語・学術語より広い概念を表す。(中略)広狭両義の専門語は自己の職業や専門の必要上から通達の能率を高めるために作られる。すなわち作られた上ではそうでもないが、少なくとも作るときは、他の職業や専門に属する人を意識していない(下略)」

と記されて、広義・狭義に分けて定義されている。この定義では「専門語」を、

- ① 特定の社会で人為的に作られた特定の単語。
- ② 職業や専門を同じくする人の間に使われる。
- ③ 職業や専門の必要上、通達の能率を高めるために作られる。
- ④ 「専門語」のほうが「学術語」より広い概念を表す。
- ⑤ 自然科学用語・人文科学用語から芸術用語・法律用語・宗教用語までも含む。

ものと見ている。ここでいう「広義の専門語」が「専門用語」であろう。例えば、広告業界や不動産業界あるいは金融業界その他の各種業界の用語には、学術・技芸ではなくても、明らかに専門用語と言ってよいものがたくさんある。

『国語学大辞典』における「専門語」の定義は、それらを覆い得るものとなっている。

2) 専門用語の範囲

専門用語という、概して科学、殊に自然科学関係の用語が意識されることが多いが、『国語学大辞典』の記述では「芸術用語・法律用語・宗教用語などを含む」とあって、単に科学用語だけではないことが指摘されている。現実の社会では、更に広範囲にわたり、様々の分野で専門用語が認められる。

専門用語の範囲を限定するのは難しいが、先の定義にみられるように、

- ① 専門領域・職業・社会などが限定的に明示される必要がある語
- ② その分野で一定の定義が与えられて(あるいはそれに近い共通理解が成立している状態で)用いられる語

と括ってよいものと考えられる。

3) 専門用語と一般用語との重なり

専門用語とされる語のなかには、一見して専門用語だと判断されるものと、一般の用語と全く同じ語形で、ただ見ただけでは専門用語だと思わないものがある。

例えば、「マイクロ波スペクトロメータ」〔気象〕、「音声周波多重電信」〔電気〕などは、その内容が分からなくても専門用語であろうということは容易に見当がつく。ところが、「かたより」、「れんが」、「せつぞく」などという言葉は、それが分野によっては専門用語として扱われるということに、すぐには気が付かないのではないか。『学術用語集』を見れば、次の通りである。

- 〔かたより〕(かたより・偏り・片寄り)
：統計・機械・計測・農学・
物理・気象・分光・地震・機
械
- 〔れんが〕(れんが・レンガ)：地震・機
械・土木・採鉱
- 〔せつぞく〕(接続)：数学・電気

2. 辞書の取り上げ方

1) 国語辞典が専門用語を取り上げる観点

国語辞典を編集するには、大きな辞書でも小さな辞書でも、必ずその辞書の編集方針がある。項目の選定、解説の方式、意味区分などいずれ

も、この編集方針に添う形で決められる。専門用語、および専門分野における意味の取り扱い方についても、編集方針によって定められる。

私が編集にかかわった『大辞林』の場合は、その専門分野における基礎的な用語、日常生活に係わりの深い専門用語、および一般的な教養として知っておくことが必要だと思われる専門用語は取り上げるという方針であったので、各種の分野の専門用語が見出しに立てられた。冒頭に述べたように、現代の日常生活にはかなりの量の専門用語が入り込んできている。それは今日の社会全体のありようの中で必然的であり、やむをえないことである。専門用語が専門家の間で用いられているうちは専門家の世界の問題であるが、一般の社会生活の中で使われ日常性を強めるに従って、その言葉の意味を確認するために、専門用語辞典ではなく手近な国語辞典が引かれる機会がふえる。殊に大きな国語辞典には、専門用語についてもある程度解説があるだろうと期待される。国語辞典を編集する側としては、その期待の全てに応えるのは無理であっても、基本的な語や一般的になってきている語は見出しに掲げておく必要があると考えるようになる。『大辞林』は、10万を超える百科項目を掲げ、その中には専門用語も多い。

2) 辞書の解説

その語が専門用語なのか一般の言葉であるかによって、辞書は解説の内容やスタイルを変えなければならないことがある。

例えば、「硬さ」という語がある。これは「硬い」という形容詞の派生形(名詞形)であって、普通の国語辞典なら「硬いこと」、小さい国語辞典なら派生語形として示すだけで、解説もなしに片付けられてしまう語である。ところがこの「硬さ」という語は、心理学の専門用語でもある。この語を、心理学の用語として辞書が取り上げるとすれば、

「②〔心理〕行動・思考に関して、個々の状況に対応する融通性・柔軟性がないこと。」《大辞林》

という、普通の言葉の「硬さ」とは異なった解説を加えることになる。

また、「学習」という語は日常性の強い語で、「勉強」と同義語ぐらいに考えられる語である。「学習参考書」「学習塾」などとも使う。このありふれた「学習」という語は〔教育学〕ではもちろんのこと、〔心理学〕〔生物学〕での専門用語でもある。そうなれば、単に「勉強する」という解説のみで終わることができず、

〔教育〕新しい知識の獲得、感情の深化、よき習慣の形成などの目標に向かって努力をともなって展開される意識的行動。

〔心理〕過去の経験によって行動の仕方がある程度永続的に変容すること。新しい習慣が形成されること。

〔生物〕生後の反復した経験によって、個々の個体の行動に環境に対して適応した変化が現れる過程。ヒトでは社会生活に関与するほとんど全ての行動がこれによって習得される。

《いずれも大辞林》

というような、各分野の専門用語としての記述が必要となる。最近では、ワードプロセッサにも「学習機能を備えている」ものがある。ワープロは人間でも生物でもないのだから、この「学習」の意味には上述の定義をそのまま当て嵌めるわけにいかないのではないか。昨今のワープロの普及状態を見ると、「学習機能付き」という説明は一般の人の目に触れる用語となり、国語辞典としてはこの場合の「学習」の意味を新たに書き加えるべきか否かを検討しなくてはなるまい。

こうした事例から見ても、どの語がどの分野で定義されて使われる専門用語であるかということは、辞書編集者にとっては是非ほしい情報である。その意味で、総合的な専門用語集の一日も早い完成を期待している。

普通の言葉でもあり、また専門用語でもある項目の解説は、

- a. 一般語としての解説だけ
- b. 一般語と専門用語両方の解説
- c. 専門用語としての解説だけ

のいずれかの形となる。どの形で扱われるかは、

個別の語ごとに、一般語と専門用語のウエイトの違いで決められ、そのほとんどが執筆者ないしは編集部の主観的な判断によっているのが実状である。『大辞林』では、専門用語であることが分かっている語でも、その語の一般的な意味で解釈して概ね正しい場合は一般的な意味だけを記述し、特にどの分野の専門用語と断っていない項目も多い。他の国語辞典も同様である。

「ガラス」〔化学〕

「肥料」〔農学〕

「生け垣」〔建築・農学〕

などはその例で、いちいち分野を示していない。

3. 専門用語の表記

国語辞典のもつ機能の一つに、その語をどう書き表すかを示す、ということがある。辞書の利用者が、言葉の書き表し方を確かめるために引くことが多い。

一般の国語語彙には、「常用漢字表」「現代仮名遣い」「送り仮名の付け方」といったルールがあり、不十分なところはあっても表記の拠り所とするものがある。また、和語と漢語は漢字か漢字仮名混じりで書き、外来語は片仮名で書くという一般的な慣習もある。ところが、専門用語の場合、こうした一般語に関する表記上の約束が、必ずしもそのまま適用されていないことがある。各分野の『学術用語集』を見比べると、個々の専門分野では表記上の決まりをもっているが、それは各分野でのことで、横断的な規則ではない。

例えば、先に例を挙げた「かたより」「れんが」を『学術用語集』で見ると、

〔かたより〕「かたより」〔統計・機械・計測・農学・物理〕

「偏り」〔気象・分光・地震〕

「片寄り」〔機械〕

〔れんが〕「れんが」〔地震・機械〕

「レンガ」〔土木・採鉱〕

となっていて、平仮名と漢字の違い、漢字の用字の違い、あるいは平仮名と片仮名の違いなどによって、表記が分野ごとに違う。「日干しれんが」は〔建築〕の、「日干しレンガ」は〔土木〕の用語となっているなどは、辞書を作る立

場から見ると誠に困る状態である。

用字は一定しているが読み方の違う有名な例に「細胞」がある。『学術用語集』では、

「さいほう」〔植物〕

「さいぼう」〔物理・分光・化学・動物・遺伝〕

となっている。濁るか濁らないかの違いだが、語形が異なるという点で注目される。どちらの語形を採用するかによって、辞書では見出しの配列が変わる。

「さいほう」「さいぼう」とは逆に、語形は一定しているのだが用いる漢字が二通りあるものもある。最近では「超でん導」superconductivity の例があり、「超伝導」と「超電導」との両様の表記が使われている。『学術用語集』では、〔物理〕も〔電気工学〕も「伝」になっているが、現実には電気関係の分野で「電」が使われているという。『大辞林』では両方の表記を掲げ、「伝」の方を先に置いてある。専門家の意見を聞き、conductivity の意味を考えると「電」よりも広い概念を表す「伝」の方が適切であると判断したからである。

外来語を片仮名で書くということは、『学術用語集』で見える範囲ではどの分野も揃っているようである。ところがこの片仮名を外来語以外に、

「ケイ素」〔化学・原子・採鉱〕

「フッ素」〔化学・原子〕

のように、元来は漢字で書かれた部分に使用している分野がある。その分野の『学術用語集』には、常用漢字表にない漢字を仮名書きにするときは片仮名を使う、と凡例にことわっているので、

「ケイ素鋼」〔土木〕

「フッ素ゴム」〔化学〕

「フッ素分析」〔地学〕

はその伝だなと納得できる。ところが「フッ素樹脂」〔化学〕には「ふっ素樹脂」〔電気〕と平仮名を使う分野があるし、「けい素樹脂」〔建築〕も平仮名でこれには片仮名表記の分野がない。弗素や珪素の「弗」「珪」を平仮名で書いている分野の『学術用語集』には、表記は「常用漢字表（あるいは「当用漢字表」）」「現代仮

名遣い」「送り仮名の付け方」などに従っている、とだけしか記されていないので、当然平仮名書きにされたわけである。

国語辞典でも、専門用語は専門分野で決めている表記を尊重したいと思うのだが、この状態では読者がかえって混乱してしまうので、『学術用語集』にある専門用語も表記だけは国語項目の表記の決め方のルールをそのまま適用している。こうした表記の面は、各分野での伝統や慣習があるにしても、比較的調整しやすい問題ではないかと思われるので、関係分野の間で表記統一について協議してほしい。

4. 隣接する学問領域間の調整

『学術用語集』をはじめ専門用語集の類は、主として英語（外国語）との対応、英語（外国語）の訳語としての専門用語という観点が強く感じられる。それはそれとして、projection, reaction, receiver の3語の英語と、日本語の対応関係を『学術用語集』で見ると、次の通りである。

projection	「映写」〔機械〕
	「射影」〔数学・物理・地震〕
	「投影」〔物理・地震・機械・船舶・数学〕
	「投射」〔電気・地震〕
receiver	「レシーバ」〔船舶・電気〕
	「レシーバー」〔化学〕
	「受け器」〔化学〕
	「受量装置」〔電気〕
	「受動機」〔船舶〕
	「受液器」〔機械〕
	「受信器」〔物理・計測〕
	「受信機」〔電気・船舶・航空〕
	「受話器」〔電気〕
reaction	「反応」〔植物・機械・採鉱・化学〕
	「反力」〔機械・建築〕
	「反作用」〔農学・機械・物理・地震〕
	「抗力」〔物理・地震〕
	「応動」〔植物〕

いずれも一つの英語にいくつもの日本語が対応している。この逆に、異なる英語に同じ日本語が対応している場合もある。これは各分野の歴史と諸事情のなかで、必要があって作られ使用されてきた専門用語を、現在に至って横断的に見たとき、このような対応関係を構成することになったものであるからやむをえない面もあるが、それにしても「機」「器」などの用字を含めて、もう少し整理されてもよいように思われる。

このあたりが、先述のように『国語学大辞典』で野元氏が、「専門語は自己の職業や専門の必要上から通達の能率を高めるために作られる。

（中略）少なくとも作るときは、他の職業や専門に属する人を意識していない（下略）」と述べている所以であろう。学際的な研究やプロジェクトが盛んな今日、用語や用字に関して共通な部分を広げて行く努力が求められているのではないか。

もっとも、subject に対する訳語が「主語・主体・主観・主題」などとあって、そのために文法論などでは論理的に明確な日本語が書けるという利点を生んだ例もあるから、1語に対する訳語がいくつもあることを一概に非難することはできないが。

5. 専門用語の項目に与える定義

国語辞典は、当然のことであるが、その語の意味を書く。専門用語として扱う場合には、その語の所属する分野を示し、その定義を書くことになる。

現在の『学術用語集』は日本語に対応する英語を示しているが、定義が全く与えられていない。国語辞典が取り上げる際には、その用語の定義をなんらか別の方法で見付け出さなくてはならないことになるが、国語辞典に記載する妥当な定義を得ることは、かなり難しい仕事なのである。『学術用語集』で各用語に定義を与え、専門用語辞典に成長させることが強く望まれる。

既にいくつもの分野で専門用語辞典が作られており、国語辞典の編集に携わる者はその恩恵を受けている。共通の分野で複数の用語辞典が出ている場合があり、そのこと自体は大いに歡

迎すべきことなのだが、同一の用語に与えられている解説が、辞典によってかなり異なることがある。それもまた立場や理論の違いに発するものであろうから、辞典それぞれの立場によって解説が異なることも当然あり得ることとして理解できる。問題なのは、専門家以外の者がこれを参考にしようとする場合、どこまでがその分野での通説（あるいは共通の定義）であり、どこからがその辞典（の编者）の独自の考えが反映しているのかが全く分からないことである。せめて基本的な用語だけでも、各分野で定義を確認することは出来ないものであろうか。また、意見の分れるところは「一般には（普通は）…」「多くの場合…」「〇〇の立場では…」といったスタイルになっていることが望ましい。

殊に、新たに発達した専門領域では、用語の定義が安定しないままに用いられて、専門家同士でも微妙に違う場合がある。専門用語というものがいわば中央集権的に作られるものではなく、個々の専門家の使用した語が次第にその分野で一般化し、共通の用語になってゆくという過程を考えると、がっちりした定義を持たないままに使われる、あるいは人によって了解の仕方に多少の相違が生ずるものもやむをえないことであろう。しかし、早い段階で用語とその定義を可能な範囲で統一することを考えたほうが、その分野の発展のためによいのではあるまいか。

更に言うならば、専門用語辞典は当然ながらその分野の専門家の便宜のために作られているため、解説自体に専門用語や専門的表現が多用され、その分野の基礎知識の乏しい者にはしばしば難解である。その分野の専門家のための辞典だから、専門家が正確に理解できればいいのであって、専門外の者に理解不能であるのは当然だという考え方もあるだろう。また、分かり易く書こうとすると曖昧な表現になったり、不正確な表現になるという恐れもあるに違いない。ここにも野元氏の言う、「専門語は自己の職業や専門の必要上から通達の能率を高めるために作られる。（中略）少なくとも作るときは、他の職業や専門に属する人を意識していない（下略）」という指摘のとおり状態が生じていると思う。専門用語辞典といえども実際は専

門家ばかりが使うわけではないので、正確で、かつ理解しやすい文体での解説を期待したい。

またどの専門用語辞典もそれぞれ独自の編集方針をもって作られており、他分野はおろか隣接分野の専門用語辞典とも調整されていない。大型の国語辞典が専門分野の用語を取り扱うようになり、各分野の用語を集め定義を与えて掲げている。しかし、国語辞典はあくまで国語辞典であって、その扱い方には限界がある。国語辞典には、専門用語であっても一般語としてしか記述しない項目があることは、先にも述べた。この点で、専門用語辞典として見ると国語辞典には不十分なところがあると言わざるを得ない。それでもなお、幅広く専門用語を集め、同一の方針、同一の形式で整理し、複数の分野、殊に自然科学・社会科学・人文科学にわたる各分野の定義を併せ掲げている辞典は、目下のところ百科事典と大型国語辞典だけではなからうか。特に1冊の辞典では、大型国語辞典がかなり大きな役割りを果たしている。

自然科学の方面ではかなり広範囲にわたる大きな用語辞典が作られるようになったが、人文科学・社会科学の方面ではまだ横断的な用語辞典は実現していない。まして全分野を覆うような総合的専門用語辞典は、まだ全く存在しない。各分野の用語を組織的に整理した専門用語辞典の完成が強く望まれる。

全ての専門用語の定義を、各分野をまたいで統一するなどということはおよそ不可能なことであるし、その必要もない。しかし、分野ごとに用語の定義を明確にする（基本的な用語だけでもいい）ことは必要であるし、各分野の協力があれば実現出来るのではないだろうか。各分野での定義が明らかにされれば、それを集大成することが可能になる。そういうものができれば、国語辞典も専門の分野と一般の人との橋渡しの役割りをより一層効果的に果たせるようになると思うのである。

6. 専門分野の構造

専門用語を論ずるに当たって、「専門領域」あるいは「専門分野」という語を用いることに何の疑問も抱かない。また、「隣接する分野」

とか「学際的」などという表現も用いる。

『学術用語集』に記された「○○学編」という表示は、いわゆる専門分野を表しているものと考えてよいだろう。『学術用語集』の専門分野を一覧すると、

数学・天文学・物理学・気象学・海洋学・
地震学・分光学・化学・動物学・植物学・
地学・遺伝学・機械工学・電気工学・建築
学・船舶工学・航空工学・計測工学・原子
力工学・農学・歯学・論理学・キリスト教
学・図書館学・地理学・心理学・土木工学
・採鉱冶金学

の28領域がある。これを見るとき、直ちに抱くのは、一体どういう視点からこうした領域設定がなされているのだろうか、という疑問である。

まず、分野の分け方のレベルに違いが見られる。例えば、物理学・化学という大きな範囲を覆う分野が設定されているにもかかわらず、分光学という分野が独立している。動物学・植物学があって遺伝学がある。

もう一つは、領域の重なりが考えられる。例えば、地学・地震学・気象学・海洋学などである。また「～工学」という分野がいくつもあるが、相互に重なるところがあるのではないか。

こうした現在の分野設定の延長上で、用語整理の作業が進められたとき、将来全ての領域が過不足なく覆われる見通しが立つのか、という疑問を強く抱く。これまでいくつもの分野でなされてきた努力を無駄にしてはいけない。また、実際に専門用語をまとめ得る学会のある分野から順次作業に入ったという現実も無視できないが、それにしても今後もそのまま領域の全体構造を展望することなく、大小の領域がそれぞれ専門用語の検討を進めて、果たして効果的・建設的な結果を生むことができるだろうか。

いま私の属するプロジェクトは、『大辞林』をコンピュータに入力してデータベースを構築しようとしている。その作業の一環として、項目あるいは語義のレベルで、それがどの分野に属するものか分類してコーディングすることを試みている。『大辞林』には社会科学・人文科学・自然科学のあらゆる領域の用語が載っているし、さまざまな職業上の用語も載っている。

そのいずれに対してもなんらかの分野コードを与えなければならない。どんな領域の用語であろうと職業であろうと、コーディング出来るようにするためには、まず専門領域を構造的に整理し、それに従ってコードを定める方式をとる必要がある。

しかし、全ての学問領域、職業の専門領域を調べ上げることは不可能であるし、今後どんな領域が生まれるか予想もできない。それでもコーディングが可能であるようにするためには、専門領域を構造的に設定して、その組み立ての原理に従えばどんな領域に対してもコードを与えられるような仕組みにしておくよりほかはない。領域の設定には、かつて広く利用された図書館の十進分類法を応用することを考えて検討してみたが、そのままではわれわれの作業にうまく適用できそうもないことが分かったので、独自の分類法を開発することにした。基本的には3桁のコードで、どうしても必要な分野では4桁のコードで表せるように、専門領域を設定してコード化しようとしている。その構造は常識的に、桁の大きいほうは上位の広い領域を表し、桁が下がるにつれて下位の狭い領域を示すようにしている。

今後は一層専門分野は細分化され、職業の専門化が進むであろう。また、専門分野が細分化されれば、必然的に専門分野をまたぐ境界領域での研究が盛んになるに違いない。そうした状況が容易に予想されるだけに、専門領域を構造的にとらえ、既成の専門領域がそのどこに配置されるべきかを明確にする必要がある。パースペクティブな視野をもち、各分野の協力を得て専門用語を検討・整理するためには、センター的機能をもつ組織の、強い指導力が求められることになるであろう。

7. 和語・漢語による訳語の創作を

今後も専門分野が細分化され、学問や技術が進歩するにつれて、絶えず新しい専門語が生まれる。最近の専門用語は外国語をそのままカタカナで書いたものや、原語の頭文字を取っただけのものが多い。その多くは専門家以外の者には何のことやら見当も付かない。「エイズ(A

IDS)」という名称は簡潔性や国際性において勝るが、一般の人に提供する情報量において「後天性免疫不全症候群」という名称の持つそれに比ぶべくもない。

専門用語に接する者が必ずしも専門家とは限らないし、国際性を必要としているわけでもないから、用語を見てどの範囲の語か見当が付くということは大変便利であるし、重要なことである。そのためには、外来語やアルファベットよりは、和語・漢語による訳語であることが望ましい。明治の初期、日本の近代化に当たって、漢字の旺盛な造語力を利用した新語・訳語の生産が大いに貢献した。最近では、訳語の生産が間に合わないのか、あるいは不正確に理解されることを恐れてか、和語・漢語による訳語の生産

量は大幅に減少している。専門家のための専門用語にとどめず、一般人にも理解できる専門用語を持つほうが、その領域の研究の発展に有利であろう。それには和語・漢語による訳語の創作が効果的だと思うのである。

[参考文献]

1. 「総合学術用語集」監修委員会監修. 学術用語集集成. 東京, 日本科学協会, 1988
2. 国語学会編. 国語学大辞典. 東京, 東京堂出版, 1980
3. 松村明編. 大辞林. 東京, 三省堂, 1988
4. マグローヒル科学技術用語大辞典編集委員会編. マグローヒル科学技術用語大辞典, 第2版. 東京, 日刊工業新聞社, 1985

学会予告

詳細については事務局にお問い合わせください。

1990年11月20-22日 International Conference for Terminology Planning, Kuala Lumpur, Malaysia

Diwan Bahasa dan Pustaka (Language and Literary Agency) と Infoterm との共催により、以下のセクションのトピックスが発表される。

Section 1: Theoretical aspect of terminology planning and language planning

Section 2: Specialized languages as tools of knowledge transfer

Section 3: Computer support for multilingual communication

Section 4: Standardization and harmonization

Section 5: Promotion of intercultural understanding

1991年10月 3rd Infoterm Symposium "Terminology for Knowledge Transfer", Vienna, Austria

以下のテーマが予定されている。

General theory of terminology and special theories of terminology

Terminology unification in theory and

practice

Terminologies and knowledge transfer

- Choice of suitable communication channels and data carriers

- Exchange formats for knowledge representations

- Project accompanying teaching and training activities

Terminology standardization

- ISO/IEC principles & methods

- National & regional terminology standardization

Tools to support terminology unification

Applications

- Arab countries

- China-Japan

- North America-Latin America

Dataflow management

- Bibliographical data

- Terminological data

- Factual data

- Universal availability of terminological publications

日本の医学用語についてのおぼえ書き

Notes on Japanese Medical Terminology

大 島 智 夫 * OSHIMA, Tomoo

1. 現代の医学用語の洪水を前にして

私が医学生の時、耳鼻科の教授が外来実習で私がただ中耳炎と診断したのをこの病気の正しい診断名は Otitis media purulenta perforativa dextra (左側化膿性穿孔性中耳炎) としなければいけないと訂正された。この時ラテン語の形容詞を器用につなげれば病名などいくらでもできるなと思った。

最近母が患った病気の病名も Immuno blastic lymphopathylike T cell lymphoma で、免疫芽細胞性リンパ系疾患様 T 細胞リンパ腫とも云うのか、5つの単語を使って一つの疾患概念を表現せざるを得ないように疾患概念が細分化し、無限にふえていく傾向を見せている。

AIDS はいうまでもなく Acquired immuno deficiency syndrom (後天性免疫不全症候群) の略であるが、はじめ症候群であったのが病原体が確定され、そのまま病名となった。日本語でのエイズも定着したが、それ自身は符号化し、言葉の意味はない。

以前日本中で騒がれたスモン病も同じく Subacute myelo-optic neuropathy (亜急性脊髄視神経障害) の略で、これも SMON (スモン) として定着して、原意もわからぬ符号となった。

このような二三の病名をちょっと見ただけでも最近の病名が文章化し如何に複雑になっているかお分かりいただけるであろう。日本で生れ

たイタイイタイ病、川崎病、水俣病などの素朴な病名は例外になりつつある。

現在最も簡約された内容を持ち、使用頻度の高い医学用語辞典 (英語系) として定評のある “Heyneman Medical Dictionary” には約 1 万 8 千語が収録されているが、最新の “Excerpta Medica” の索引にはすでに 18 万語とその同義語 27 万語がのっており、病名として約 3 万、症候群名として 5 千が日常使用され、それが最近 10~20 年ごとに倍になってゆくとされる。その中に簡略化された用語がどんどん増加しているのである。何とか整理しなければどうにもならなくなるであろうとは誰でも思っている。

自然発生的な一つの流れが頭字 (Acronym) 化であって、すでに医学用語頭字語のための特殊な辞典がいくつも出ている。

ちょっと見ただけではわけのわからぬ AAK から ZEEP まで 2 万語の医学用語略語だけを解説した “Logan’s Medical and Scientific Abbreviations” は略されたもとの言葉を知り得ない我々にとって机上に置く必要欠くべからざる辞書になっている。しかし、それにもない略語にぶつかると途方にくれてしまう。

目先の便宜のため統制も規制もなく恣意的になされた略語化は、厄介な問題を起している。

* 横浜市立大学医学部, 横浜市金沢区

ASCはarteriosclerosis(動脈硬化)の略か、American Society of Cytology(アメリカ細胞学会)の略なのか、前後関係だけからしか判断できず、データバンクにそのまま入れても、自動翻訳などにはとても使えない。CDCはアメリカのCenter for Disease Control(疾病対策センター)の略か、Communicable Disease Center(感染症センター)の略か、わからない。2字のアルファベット組合せの略語に至っては20も30も異なるもとの語がひしめいている。CTなどは勘定しただけでも60のもとの語があり、それだけ出されたらcerebral tumor(脳腫瘍)かCourvoisier-Terrier syndrome(ターボアジェーテリィア症候群)かcolons, transverse(横行結腸)の略かわからず、前後関係から判断するよりない。これらの略語が医学用語に市民権を得つつあるのだからたまらない。

この略語化はすさまじい勢で進行しており、まるで株屋の符丁のようにもはや専門家同志の間にしかわからない陰語化しつつあるのも時の勢いである。その著しい例が免疫学、分子生物学、遺伝子工学の分野で、MHC, HLA, IFN, CRPなどの略号が立派な慣用単語として通用し、それを知らない者を寄せつけない。この激増してゆく無表情な符号を専門用語としてどう扱ってゆくかは大問題である。今さら交通整理もできそうにないし、何とか略語化のルールを作らないと用語の無政府状態になってしまうのでなからうか。

2. 日本の医学用語の過去

日本の医学に関しては、明治以前の西欧の医学用語が少ない明治以前には、蘭学者たちが寄り集まり、苦心して適当な訳語を選び、または新たに造語をして対応してきた。そのいきさつは小川鼎三“医語のおこり”(東京書籍)に詳しい。もともと日本の漢方医学は経験の蓄積による対症療法の体系であったので、用語についての厳密な定義を必要とせず、病名すらも疝気とか癩とか俗称をそのまま平然と借用し、吉益東洞などは万病一毒説を称えて病気に種類があることに無頓着であった。

日本語医学用語の選定の必要がにわか高ま

ったのは何といってもオランダ解剖学書に接してとりくんだ1774年の“解体新書”の翻訳出版からであり、オランダ語の医学用語に対応する新しい日本語医学用語を創出する苦心は杉田玄白の“蘭学事始”に詳しい。前野良沢、杉田玄白、桂川甫周らが苦心した造語のうち、神経、軟骨、門脈、動脈、卵巣、盲腸等は傑作であり、今日もそのまま使われている。しかし訳せぬ語も沢山残った。その後、日本の医学用語形成に大きな功績を残したのは1805年に出た宇田川玄真の“医範提綱”であり、その中に靱帯、腺、乳糜、鎖骨、空腸、結腸、腎盂、膀胱等今日使われる重要な解剖用語が始めて登場した。

明治以降、怒濤のように流入した西洋医学の用語に日本語を対応させる努力はまず解剖学者たちにより始められ、1895年にバーゼルで決定されたラテン語による国際解剖用語(BNA)が1905年に鈴木文太郎らの手によって“解剖学名彙”となって世に出て、その後4回の手直しがあった。その頃の解剖名はなにしろ漢字の素養の深い明治の学者の手によって作られただけあって、今日ではお目に掛れないような多画難解な漢字が多数使われていた。1935年に国際解剖学会が解剖用語を全面改訂(JNA)したのを機会に、西成甫、岡嶋敬治らにより漢字の平易化の努力が払われた。

その後1941年、1944年の2回にわたり、西成甫、小川鼎三、尾持昌次らにより解剖用語から徹底的な難読漢字の追放と平易化と大胆なカナ書きのとり入れが行なわれ、薦骨は仙骨に、脳穹は脳弓に、淋巴はリンパに、比羅目筋はヒラメ筋に、延髄の橄欖はオリブにといった画期的な用語改正が行われた。しかし、国際解剖学会の解剖用語は1955年にパリの会議で再度変ってしまった(PNA)。日本名の改正もそれに合わせて行われ、この際は更に難読漢字の追放とカタカナ書きを積極的に採用し、頤はオトガイ、大脳鎌は大脳カマ、大村益次郎がとりだすのを得意とした3つの耳小骨はツチ骨、キヌタ骨、アブミ骨に変わった。しかしその後の組織学および発生学の分野の進展は著しく、1980年の国際解剖学会議はこの分野の新たな用語選定に迫られ、日本側もそれにあわせて改訂増補したものが、“解

剖学用語”（改訂12版，日本解剖学会編，丸善発行）として出版され，これには8,000近い用語が収録されている。

解剖用語は医学用語の根幹であるので，医学界全体が直ちにこれを採用するのが望ましいのであるが，これから医学を学ぶ学生とは立場の違う臨床家にとって，従来なじんだ名をそう簡単に変えるわけにもゆかなかった。人名が医学用語から多数追放されたことに抵抗を感じずる人も多く，私もSylvius 導水管とかWillis 動脈論というような名を残してもらいたかったと思っている。

用語に関して最も尖端的な努力を重ねてきた解剖学会の成果がなかなか関連分野に浸透せず，同じ解剖学概念に新名，旧名，慣用名という三つの同義語が日本の中で通用している事態はまだしばらく続くであろう。この弊害をなくすのに，日本医学会は傘下の各部会にまず自分たちの使用する用語を統一して制定することを早くから求めていたが，その作業は困難を極めた。その成果は一応“医学用語辞典（Japan Medical Terminology）”として1975年に見出し語87,800語，同義語24,500語を選んで出版されたが，肝心の各分科会の中には自分たちの使用する用語の制定が未だに行われない分科会が約1/3近くもあり（筆者の所属する日本寄生虫学会もまだ作業中である），整然とした日本の医学用語の体系ができるのには前途遠慮である。

3. 寄生虫学用語制定の経験

筆者は日本寄生虫学会の用語委員としてその作業に参加したのでその経験を述べてみる。そもそも医学用語の原型はラテン語であり，その大部分はギリシャ語起源であるので，ラテン語より派生した英，独，仏語では医学専門用語もこの原形をとどめ，新語が作られる際もできるだけギリシャ語文法，単語を生かした一つのルールがあったのである。例えばイヌ回虫症という新しい寄生虫症が40年前に発見された時はイヌ回虫はラテン語で *toxocara* で，その寄生した状態を表わすギリシャ語由来の語尾 *-osis* をつけて病名を *toxocarosis* とし，またつい最近発見された肝臓の中で分裂しないで

待機しているマラリア原虫の名も，眠っている状態を現わすギリシャ語 *hypno* に小さい動物や生命を意味するギリシャ語 *zoit* をつけ，*hypnozoit*（休眠原虫）としたような具合である。現在新医学用語形式の99%のイニシアチブは英語系の世界にあり，それに上記のようなルールがあるのは医学用語を無秩序にさせない支えであった。しかし，それを日本語専門用語に移す時には本来のターミノロジーは消えてしまい，その意味にあった日本語の学術用語を平易な漢字，又はカナ書きで探さねばならない。国際情報支援のためには原語もあわせて覚えねばならない二重手間が必要となる。

日本の医学用語委員会の使命は，いかに欧米で使われる医学用語を制定，公認し，勝手に自分で訳語を造成させないようにする事にあるのだが，すでにそれを待たずに多くの勝手な用語が出廻っているので，その整理が大変なのである。整理の遅れた寄生虫学界では，*cyst* という語に，シスト，嚢子，胞囊，包囊，被囊体の5語が文献上に出てしまっているのが一例である。日本人は中国人のように言語翻訳の名人でないので，適当な言葉がなかなか探せないことに原因があるのであろうか。中国人はマラリアを瘧（nüè）の1字で片付け，日本住血吸虫のことを日本血吸虫（何か非難の意もあるのか）としている。

もう一つの隘路は対応日本語と探すときに漢字を用いざるを得ないことである。動物の和名学名はカタカナ書きを原則としながら，寄生虫名は漢字を採用せざるを得ない。すると鉤虫はカギムシと読まれてしまう危険性があり，それでデータバンクに入れられたらもう永久に出てこない。蛔蟲と書かれたのはさすがに蛔虫となったが，学会で認めた蛔の字は一般に使用されないため，いつのまに学術論文にも音が同じで字画の少ない回虫が登場し，それを追認せざるを得ない。

そうかと思うと織という字は字画が多いので線で代用して良いことになっておりながら，織毛虫の織は線に変えると誤解されるので残してある。

漢字の医学用語は一筋縄ではゆかないのであ

る。そのうちにもっと困ったことに気がついた。寄生虫学界は国際的にもおおらかで用語は自然淘汰にまかせており、解剖学界のように用語の統一を積極的にはからなかったため、原語がすでに不統一のものが少なくないことがわかってきたのである。

条虫の頭節は scolex, scoleces, scolices の三つの異なるスペルが、片節に至っては, proglottis, proglottid, proglottides, proglottids という4つの異なるスペルが学術論文に登場していて、どれが正しいとかなかなか断定できない。

スペルはまだしも、概念そのものが流動性のものがある。larva という言葉はその一例である。英和辞書をひけば幼虫、幼生であるが、複雑な変態をして発育する寄生虫ではどこまでを larva とするのが線虫、吸虫、条虫によって異なっており、人によっても様々に使用されている。昆虫学では別に nymph という語を若虫としているので、昆虫学も一部とりこむ広義の寄生虫学ではよけいに複雑になってしまう。

動物学界では、vector という語に、媒介動物という語をあてているが、その語からは狂犬病をうつす犬を想像しても間違いでない。しかし原語は疾病伝播する節足動物だけに限定されて使用されている。それなら媒介昆虫とすればよいでないかといってもクモやダニは昆虫でないので困るのである。正確に疾病媒介節足動物とすれば間違いはないが、長すぎて使えない。これは原語の使用が慣行にまかせられ、それを自明のこととして定義してないからであろう。

このような用語を整理し、きちんとデータベースに入れるのには、関連学会のなお一層の国際的努力が必要である。

4. 日本の医学用語の抱える二重の問題性

日本の医学界では、国際的に20年位前まで使われてきていた基礎的な医学用語の整理、統一がまだ完成してなく、同じ事象を基礎医学と臨床医学で別々の呼称を用いているような現象がまだ残っており、まだ医学用語に関し無政府状態の分野も少なくない。これは是非とも精力的に整理せねばならない。

その上ではじめに述べたこの10~20年の間に欧米で爆発的に増加し、略号化されてきた医学用語にどう対応するのかという難問がまかまかえている。合意が得られないまま、なまの海外の専門用語と符号化したその略称がそれこそ洪水のように入ってきて、日本の医学界に市民権を得つつある。

科学技術用語は本来的に多義性であってはならず、必ず一対一の対応をせねばならぬのに、略号化は真向からこの原則に対立しているし、またアルファベットの組合わせでその国籍すらわからない。ゲーテの寓話のように、便利だからと略号化の魔法を使ってその洪水を招いた子供には、それをとめる方法を知らないのが現状であろう。

京大の長尾教授が「科学」の8月号、巻頭言に、「知識を表現する」という論説を發表された。その一部を引用すると、「一つの学問分野の知識を見通しよく示すためには、その分野の概念をすべて列挙し、これを学問体系にしたがって階層構造的に配列することであろう。概念は専門用語として表現されているので、これは専門用語の本構造を作ることの意味する。……」知識の問題は、専門用語とかかわって、奥行が深い。専門用語研究会の課題の一つといえよう。

(長山)

専門用語について

われわれが扱う範囲

大 塚 明 郎* OOTUKA, Haruo

去る1989年、われわれ同志は専門用語研究会をつくった。多くの人、特に自然科学とその応用の技術関係の人は、科学技術を分類した中の一分野に属するのが普通で、その分野内で専門用語で知識を交流している場合が多い。

ところが、一科学分野で仕事をしているものでも他分野の知識を要する場合が起こってくる。

特に技術分野では必ず他分野の知識が入っている。極端な例は、データベースをつくる場合など。

そこで使う専門用語は一分野内に限定されるものだけでなく、あらゆる分野を含む観点から捉える必要にせまられる。そこで原点に遡ることになると、

人間は自然界に生きている

そして人間誰でも五官によって自然を感得し、自然の存在を経験し、その実在を認識する。ここで実在とは、自然界の現象で、これに言語を与えて共有する。この共有の言語を現象の知識と呼ぶ（この「呼ぶ」とは、知識という言語を与えることである）。自然現象は種々あるが、このうち対象を特定の観点で限定するとき、その限定された現象に関する知識（現象に与えた

言語）を専門知識と呼び、これに用いた言語を専門用語と呼ぶ。

しかし、人間が生きてるとは現象を限定しないで、そのすべての中に生きる。その中には単に知る（言語を与える言語現象）だけというものもある。

だから人間は、人間以外の自然の現象と人間の言語現象の（両方の）中に生きている。この両現象に言語を与えて、知識としている。この両現象の中から範囲を限定すれば、その範囲の知識は専門の知識であり、これに用いる言語は専門用語で、自然界も人間界も含めての用語となる。

このように考えの範囲を広げると、専門用語とは、人間のあらゆる分野の知識に広がる。

われわれの専門用語研究会は、この広義の専門用語にわたるとしたうどうだろうか。

*専門用語研究会会長

専門用語研究会の将来構想試案

長 山 泰 介* NAGAYAMA, Taisuke

1. はじめに

専門用語研究会が発足してから、早くも1年有半を経過した。会員数も100名を越え各方面から関心を持たれ、外から見ると順調に経過しているように見える。研究会の運営、事務局を担当してみると、問題点は山積、研究会がどうなるのか、苦しい事だけが目につく。

西暦1990年という新しい年代を迎えたので、将来の夢ともいうような構想を考えるのも楽しいことで、たたき台という意味で、全くの私案を述べて、ご批判を仰ぎ、この問題について、大いに討論が湧くことを期待したい。

2. 研究会は何をするか

この問題は、有志が設立総会の時に議論をしたことである。Infotermという国際機関が既にあり、ターミノロジーに関心のある人が集まって横断的な機関は何となく必要ということでは意見は一致していた。

ここで何をやったらよいのか、学際的分野での情報交換が先ず必要であり、そのためには、シンポジウムの開催とニューズレターの発行ということであった。現実問題としては、皆ボランティアで事務的なことまでカバーするのは大変なことであるが、何とか曲がりなりに少しづつ前進をしてきた。

現在の会員の構成を見ると様々である。主題

の専門家で、学術用語、標準化などに関係し、専門用語に関心を持っている人達、言語学の立場から専門用語を研究している人達、データベース、情報検索など、シソーラスを通して専門用語に関心を持っている人達、情報科学でも知識工学、機械翻訳などの一つとして、専門用語に関心を持っている人達、科学技術関係の翻訳者、辞書出版、編集者など広い意味で言語産業に関係する人達、さまざまである。多様な関係を持っている人達に対して期待に答え得るような研究会はできるのであろうか。

研究会に入会する人は、何を期待しているのだろうか。十分な調査もしていないので、正確とは言えないが、大凡は次のようであると考えられる。研究会全体で何か研究するという事は難しい。研究をする人達には、自分の研究のテーマを見つけたり、何かヒントが得られたらよいと思っているかも知れない。専門用語に関係する業務にたずさわっている人達には、参考になる情報を得たいと期待している人達もいる。学会のようになるなら発表の場として利用したいという人もいるであろう。またマクロな立場から考えると、情報化社会の進展に向けて、専門用語の立場から大きなプロジェクトへの提言、国や政府、団体などへの提言の場としたらよいという考えもある。現在ぼつぼつ

* (財)日本医薬情報センター、東京都千代田区

問い合わせもあるのだが、国際的な窓口を果たす役割を考えるべきという意味もある。特に日本は、いろいろな点で国際的にも指導的な役割を果たすべきであり、現に国際機関として Infoterm が活動しているので、密接な連絡を取りながら、国内での意見をまとめたらいという意見もある。

一方、研究会に対してネガティブな意見もある。会費で運営しているが、果して会費に見合うだけのメリットが得られるのであろうか。国際的な問題には国が関与すべきで、有志による研究会の形で背負うのは重荷ではないだろうか。産業界では、企画はできるだけ秘匿し、共同で研究開発するようなことは、大きな調整力がないと難しいという習性がある。研究会という形で産業界の協力を得るのは困難が伴うという意見である。そして専門用語は非常に関連は広いが、この問題を中心課題とする人は少ないという点に一つの問題もある。

3. 研究会の将来構想の一案

研究会は果して学会になり得るだろうか。つまりターミノロジーは学問の一分科になり得るか。専門用語とは何か。言語学と果して異なるのか。これらのことについては、大いに議論して貰いたい所である。

専門用語の問題は、科学というよりは、科学の周辺的な意味で課題が多い。プライスの表現を借りれば、science of sciences、科学周辺という意味ではパラサイエンスという言葉を使ってもよいかもしれない。科学を進展させるための標準化や概念と用語の問題は、学問の各分野が進展すればする程、課題もふえる。専門用語の数が数十万から百万と殖えるにつれて、課題も多くなってくる。これらの一部は文部省の科学研究のテーマとして取り上げられた。このために専門用語に関心を持つ層も増えてきており、テーマも恐らく増えて行くであろう。

一方産業界でも、顕在化しているとはいえないが、潜在的には課題が多い。産業規格を定める時には先ず用語の定義を決めてから規格が作られるが、ここでの用語と学術用語との調和が

課題である。情報検索、知識工学、機械翻訳など、専門用語の整理が不十分なために、壁にぶつかり、マスの形で解決を迫られるケースも多々ある。

このように考えると、研究会としてのレーゾンデートルは十分にありそうであるが、この研究会を運営維持して行くための方策という難問がある。

運営という面から考えると、学術団体としての機能と、産業界、研究機関、大学などに役立つ専門用語情報センターの機能をあわせ持つことがよいのかも知れない。専門用語情報センターでは、専門用語を収集、処理して、必要に応じて提供するということになる。大きなプロジェクトとしては専門用語のデータベースを作ることになるが、日本が世界に先がけてやってもよいかもしれない。

最も重要な問題は資金面である。情報センターの一般的な運営形態としては、機能がある程度充実するまでは、国の資金、若しくは公益の資金を投入し、維持、管理は収益によって独立できれば理想的である。研究会はいずれ名称をかえ、公益法人として生まれ変わる必要がある。公益法人には監督官庁が必要である。産学協同ということを考えると、文部省と通産省が最も関係が深く、科技厅をはじめほかの官庁も若干の関係を持つという横組織を必要としよう。学術団体と情報センターが表裏一体となって組織されれば、国際的にも評価を受けることになる。

このような夢を実現するには、恐らく年に数億程度の資金と、10年位の長期的な見通しを立て、各方面での協力を得る必要がある。夢のような話である。幸い、平成元年度にはINS社はデータベース振興センターから専門用語に関する実態調査に関する補助金を得ることができた。データが揃えば将来計画もはっきりしてくるであろう。

専門用語に関する学術団体と、データベースやライブラリーを備えた専門用語情報センターが表裏一体となって機能する機関を目指すことも、研究会の一つの方向ではなかろうか。いろいろな意見を期待したいものである。

専門用語研究会の役割

細野 公男* HOSONO, Kimio

研究活動の学際化、国際化、多様化、そして専門分野の細分化とその扱う範囲の重なりでの進行は、近年の学术界に固有な現象の1つである。その傾向はますます顕著になっているといっても過言ではないが、このような状況のもとで学術活動を円滑に遂行し、情報や知識の検索、加工、伝達、交換をより効果的に行えるようにするためには、そこで使用される概念、用語の標準化をはかることが不可欠である。

専門用語は、学問分野内での効果的な意志の疎通、円滑な情報の流通を可能にすることを目的として使用される、各分野に固有な学問上の語といえることができる¹⁾。したがって、専門用語は正確であり明確でなければならない。そして専門用語がきちんと整備されていれば、情報交換、意志の伝達において共通の基盤が確立されることになるので、学術の発展と交流が大いに促進されることになる。この意味で1988年に専門用語研究会が設立されたのは、きわめて時宜を得たものといえよう。

しかし、わが国において専門用語の体系を整備することの重要性が認識されるようになったのは比較的最近であり、それに対する関心は一般にまだ低いといわざるをえない。これは専門用語における外来語の影響がきわめて強いわが国の特色を考えれば、憂うべき現象といえよう。このような状況において専門用語研究会の果たすべき役割は何であろうか。少なくとも次の3つが考えられる。

①専門用語の機能、定義および専門用語に固有な特徴を明らかにする

この中には専門用語の時代的な変遷の調査、専門用語に限らず一般語の頻度調査など基礎的なデータの収集など種々の目的に応じた実態調査や、用語の社会的、文化的、あるいは

言語学的分析など関連する各種の理論的研究が含まれよう。

②専門用語を決定しその管理を行う

個々の研究分野で固有の専門用語の体系を確立することは、機械翻訳や情報検索をはじめとして自然言語との関連が深い各種の情報処理システムの高度化にとって必要であるだけでなく、各分野における研究開発の遂行および教育の実践においても不可欠である。これらの活動の成否は明確で適切な専門用語の存在を前提とするからである。各種の辞書、シソーラス、用語リストの編纂はこの範疇に入ろう。学術用語集や用語JISの編纂に対する協力もその例としてあげられる。言語は学術研究の進歩・変遷、時代、社会的ニーズなどと共に変化するので、それに合せて専門用語を適宜改訂することもきわめて重要である。専門用語の決定・管理には機械的な側面が強いが、その際に①が理論的根拠あるいは基礎データを提供することになる。

用語の標準化に関する取り組みも必要である。専門用語の中には外国語をカタカナに翻字したものが多く、このような語のカタカナ表記(翻字)には多くのゆれがみられる²⁾。また、同一概念を異なった用語で表現する場合も多い^{3), 4)}。わが国では学問、知識、技術に関して多くの概念が輸入されてきたが、それを該当する日本語で置き換えたり、翻字するとき種々の問題が生じている。異なった分野間で同じ概念に別の用語があてられていても、情報管理、意志の伝達にさほど大きな障害はきたさないかもしれないが、同一分野内ではその分野の発展を阻害する一因となる

* 慶応義塾大学文学部、東京都港区

う。したがって、専門用語を決定するルール作りとその使用の徹底をはかり、できるだけ用語を統一することが望ましい。標準化の問題はその必要性が指摘されているにもかかわらず実際はあまりうまくいっていないが、これは用語の標準化についても同様である。また既にカタカナ表記が複数個存在する概念に関しては、複数個の表記を自動的に1つに統一する方法の開発が必要となろう⁵⁾。それによって、例えば、情報検索では1つの統一された用語での検索が可能になるからである。

③専門用語の取り扱いに関する意識を高める

用語の乱れが学術研究における情報の検索と伝達の厳密さを阻害するおそれがあるにもかかわらず、一般にわが国では専門用語と限らず学術分野でのことばの使い方に対する配慮が十分になされているとはいいがたい。例えば、情報処理関係の用語 J I S あるいはその他の用語集の中には、表現が不適切なもの、あいまいなもの、意味が不明確なものが非常に多い。この傾向は外国の用語集の翻訳に顕著にみられる。これらは、情報処理に携わる担当者や研究者であっても、情報を担いまたそれを探するための媒体である専門用語の取り扱いに対する関心が薄いことを示している。

これがとくに問題となるのは、輸入された概念の取り扱いである。その一例をあげてみよう。検索結果の適合性 (relevance) を具体的に測る代表的な尺度の1つとして、複数個の索引言語間の検索効率を相互比較した Aslib Cranfield プロジェクトで導入された、「検索された文献中に占める適合文献の割合」を示す概念がある。プロジェクトの最初の段階ではこの概念に relevance ratio という用語が当てられていたが、その後 relevance ratio が検索性能を総称する適合性 (relevance) という用語と概念的にも言語表現上でも明確に識別できないことが明らかになり、妥当性の検討が行われた。その結果 relevance ratio の代りに precision ratio (精度) という用語が採用され⁶⁾、以後米英ではこの用語が定着した。これは専門用語の決定に対して注意深い取り組みがなされていることの一例とい

えよう。それに対しわが国では、初期に使用された relevance ratio に相当する適合率という訳語が、その妥当性の吟味がなされることなく、コンピューターメーカーの情報検索システム開発担当者の一部を中心にいまだに使用され続けている。

用語の使用に関する意識の向上をはかることによって正確かつ明確な専門用語の体系が確立でき、その結果、各種の情報処理に使用する機械可読形式の辞書の見出し語や情報検索に使用するキーワードの決定が容易になる。専門用語の意義、あるべき姿、そして情報交換、意志の伝達手段としての重要性を周知徹底させることはきわめて重要であり、わが国ではこの重要性は諸外国よりもはるかに大きいのである。

したがって、専門用語研究会に課せられた役割は、学術の発展、交流、とくに情報のより効果的な流通をはかるために、上述した研究や実践を多面的、学際的に行っていくことといえよう。

- 1) 細野公男。専門用語とシンソーラス。日本語学。8(4), 38-46 (1989)
- 2) Hosono, K. et al. Analysing characteristics of kanji and katakana scripts of technical terms in science and technology fields. 2nd International Conference on Japanese Information in Science, Technology and Commerce 予稿集. 1989. p. 472-484
- 3) 専門用語研究会ニュースレター, 第1号. p. 7 (1988)
- 4) 第1回専門用語シンポジウム予稿集. p. 3, 専門用語研究会. 1989.
- 5) 原田隆史他。カタカナ表記をとる技術用語における表記の多様性。三田図書館・情報学会 1985年研究大会予稿集. p. 57-60.
- 6) Cleverdon, C. W. et al. Aslib Cranfield, Research Project: Factors determining the performance of indexing systems. vol. 1, p. 11-13, Cranfield, 1966.

お知らせ

専門用語研究会第3回総会記録

日時：1990年5月25日 11:30~12:00

場所：神田学士会館（東京都千代田区）

出席者：45名

司会を太田幹事が、報告を長山幹事が分担し、すでに全会員に配布済みの「平成元年度事業活動記録案」、「平成元年度決算報告書案」、「平成2年度事業計画案」、「平成2年度事業予算案」を審議し、全員一致でこれらの案を承認した。

会則改定案はすでに全会員に配布されたが、その審議承認は次回総会でおこなうこととし、それまでは現在の役員が留任することになった。会務の増大に対処するため幹事を2名増員することとし、細野公男、宮島達夫の両会員を幹事とすることが承認された。

第3回専門用語シンポジウム

「専門用語としての日本語」を主題とするシンポジウムが1990年5月25日に神田学士会館で開催され、97名が参加した。

挨拶：大塚明郎（専門用語研究会長）

藤川正信（図書館情報大学長）

特別講演：International and Regional
Co-operation in Terminology
C. Galinski（Infoterm 所長）

シンポジウム「専門用語としての日本語」

日本語の特性から見た漢字 鈴木孝夫
（慶応義塾大学言語文化研究所教授）

専門用語と認知科学的文字論 山田尚勇
（学術情報センター研究開発部長）

司会：香川靖雄（自治医科大学教授）

コメントータ：伊藤隆太（薬効開発研究所長）
細野公男（慶応義塾大学文学
部教授）

平成2年度幹事の業務分担

6月26日に開催された第6回役員会において、以下の業務分担が決定されました。

会長	大塚 明郎
幹事（総務・財務）	長山 泰介
幹事（会合）	宮島 達夫
幹事（渉外）	細野 公男
幹事（編集）	太田 泰弘
幹事（事務局）	金森 國臣
監事	杉山 光
監事	仲本秀四郎

企画委員長	香川 靖雄
国際委員長	中井 浩
編集委員長	太田 泰弘

第4回専門用語シンポジウム開催のお知らせ

7月13日に開催された第7回企画委員会でのスケジュールを決定しました。

日時：1990年12月14日（金）

場所：国立国語研究所（東京都北区）

内容：

一般講演（講演を募集します。標題および著者名を9月末までに事務局に提出してください）

シンポジウム“日本語教育・外国語教育における専門用語”（仮題）（外国人に対する専門用語教育、日本人に対する専門用語教育について、教育担当者による討議懇親会

投稿規定

「専門用語研究」投稿規定

1. 「専門用語研究」(以下「会誌」という)には、ターミノロジーの理論と応用、専門用語集の作成技術、その他、専門用語に関する記事を掲載する。
2. 会員は会誌に投稿することができる。投稿に当っては、「専門用語研究」投稿の手引きに基づいて原稿を作成する。編集委員会からの依頼によって執筆する原稿も同様とする。
3. 学術論文の原稿が提出されたときは、編集委員会は査読を経て、その採否を決定する。
4. 会誌に掲載された論文の著作権は、原則として専門用語研究会に帰属する。

編集後記

専門用語研究会の顔の一つである機関誌「専門用語研究」の創刊によく漕ぎつけました。総会で今期2冊の発行をお約束しましたので、外観が貧弱になり、申しわけありません。会員が増えて資金が潤沢になるまで御辛抱いただきたく存じます。

第1号は第2回シンポジウムでの発表論文の特集といたしました。研究会のあり方をめぐる寄稿を3編掲載しましたが、次号からは会員からの投稿論文が増えることを期待しております。

(太田)

「専門用語研究」投稿の手引き(暫定)

1. 原稿の体裁
原則としてワードプロセッサで打ち出したもの(B5判、横書き)とする。フロッピー入稿も受け付ける。手書きの場合は、400字づめ横書きの原稿用紙に記述する。
2. 論文の書き方
学術論文の場合には、標準的な書き方(たとえば、SIST 08 学術論文の構成とその要素;SIST 02 参考文献の書き方)に従う。標題、著者名、および所属機関名には英文を付する。

専門用語研究 第1号(1990年8月)

発行人:大塚明郎

発行所:専門用語研究会

〒141 東京都品川区西五反田7-1-9
HSビル

Tel: (03) 495-4511

Fax: (03) 495-2995

印刷所:共立速記印刷株式会社